Kauṇḍabhaṭṭa の abhedaikatvasaṁkhyā 論

小　川　英　世

0．Patañjali は Mbh ad P2.1.1 で、複合語（samāsa）などの名詞語幹から形成される統合形（vṛtti）に関して、その意味の在り方（sāmarthya）を「意味統合」（ekārthībhāva）とする立場から、そのいくつかの特徴を意味的に等価な文との比較において挙げたなかで、統合形においては文の場合と違ってその従属語（upasarjanapada）に関して個別的な数（saṁkhyāviśeṣa）の認識が得られないということを指摘している。彼は次のようにいう。

「文（vākya）{rajñaḥ puruṣaḥ}〔「一人の王の家臣」〕、{rajñoḥ puruṣaḥ}〔「二人の王の家臣」〕、{rājñāṁ puruṣaḥ}〔「三人以上の王の家臣」〕においては、個別的な数の〔理解〕が生ずる。〔しかし〕複合語{rājapuruṣaḥ}〔「王の家臣」〕においては〔それは〕生じない。」（saṁkhyāviśeṣo bhavati vākye ... rājñaḥ puruṣaḥ, rājñoḥ puruṣaḥ, rājñāṁ puruṣa iti. *samāse na bhavati* ... rājapuruṣa iti.）〔Mbh II 509〕

{rājñaḥ puruṣaḥ}、{rājñoḥ puruṣaḥ}、{rājñāṁ puruṣaḥ}の各文における{rājñaḥ}［rājan＋Ṅas］、{rājñoḥ}〔rājan＋os〕、{rājñām}〔rājan＋ām〕はいずれも第六格語尾（ṣaṣṭhī）の名詞接辞（sUP）で終る項目である。これらの文の派生において名詞語幹〈rājan〉の後の第六格語尾導入は次の文法規則に準拠している。

P2.3.50 ṣaṣṭhī śeṣe「残余（＝関係）が理解さるべきとき第六格語尾が導入される。」

さらに、第六格語尾 Ṅas、os、ām に関する単数語尾（ekavacana）Ṅas、双数語尾（dvivacana）os、複数語尾（bahuvacana）ām の選択は次の文法規則

に基づく。

P1.4.21 bahuṣu bahuvacanam「複数性が理解さるべきとき、複数語尾が導入される。」

P1.4.22 dvyekayor dvivacanaikavacane「双数性、単数性が理解さるべきとき、それぞれ双数語尾、単数語尾が導入される。」

こうして {rājñaḥ}、{rājñoḥ}、{rājñām} の各項目はいずれも第六格語尾で終るものとして「王との関係」(rāja-sambandha) を意味するが、それぞれは数の観点から特定された単数語尾、双数語尾、複数語尾で終るものとして、王の数を個別的に理解せしめる。

複合語〈rājapuruṣa〉の派生は次の文法規則に準拠する。

P2.2.8 ṣaṣṭhī「第六格語尾で終る項目は、意味的に結びついた名詞接辞で，終る項目 (subanta) と任意に複合語を構成し、その複合語は tatpuruṣa とよばれる。」

これにより {rājñaḥ puruṣaḥ}、{rājñoḥ puruṣaḥ}、{rājñāṁ puruṣaḥ} の各文からの複合語〈rājapuruṣa〉の派生は任意である。さらにこの複合語派生においては文中の名詞語幹〈rājan〉〈puruṣa〉のそれぞれに後続する名詞接辞に関して次の文法操作が適用される。

P2.4.71 supo dhātuprātipadikayoḥ「動詞語根、名詞語幹の部分である名詞接辞にlUK（＝ゼロ）が代置される。」

{rājan＋Ṅas/os/ām puruṣa＋sU}→{rājan＋ϕ puruṣa＋ϕ}＝〈rājapuruṣa〉

こうして複合語においては名詞接辞が存在しない。複合語に対する名詞接辞導入はその複合語を含む文連鎖におけるその複合語と他の言語項目との統語関係に依存する。ところで、上記の各文からの複合語〈rājapuruṣa〉派生の任意性は、複合語においても第六格語尾一般の意味である関係が表示されるという限りでの文との意味的等価性に基づいている。したがってこの複合語においてそれと等価なものとみなされる文における〈rājan〉に後続する名詞接辞 Ṅas、os、ām が存在しないことによって関係が理解されないということはないが、王の数の特定化は数を表示 (vācaka) あるいは標示 (dyotaka) する要素が

存在しないという点で不可能である。

1．Bhartṛhari は Patañjali による上記の「複合語においては個別的な数の［理解］は生じない。」(samāse〔saṁkhyāviśeṣo〕na bhavati) という言明を二様に解釈する。すなわちこの否定文を否定詞（naÑ）の二種の機能 prasajyapratiṣedha（絶対否定）と paryudāsa（相対否定）にしたがって解釈するのである。まづ prasajyapratiṣedha の見地〔{samāse saṁkhyāviśeṣo na bhavati}〕から彼は次のようにいう。

「〔文においては〕接辞が数を表示あるいはまた標示する。統合形においては、そのような接辞に lUK が代置される部分に関して数の差別は消失する。」

vācikā dyotikā vāpi saṁkhyānāṁ yā vibhaktayaḥ /
talluky avayave vṛttau saṁkhyābhedo nivartate // (VP III, 14, k.99)

Rau, Iyer : *tadrūpe 'vayave*. Nāgeśa の読み（LM 1379）に従う。

さらに彼は、paryudāsa の見地〔{samāse a－saṁkhyāviśeṣo bhavati}〕から次のようにいう。

「あるいはまた、abhedaikatvasaṁkhyā という〔個別的な数とは〕まったく異なるものがそれ〔＝統合形〕においては生ずる。」

abhedaikatvasaṁkhyā vā tatrānyaivopajāyate / (ibid., k.100ab)

ここにおいて Bhartṛhari は統合形における従属語の指示対象の数として、一（ekatva）、二（dvitva）、三（tritva）といった個別的な数とはまったく異なる、abhedaikatvasaṁkhyā という新たな数概念を創出することになるのである。この abhedaikatvasaṁkhyā という数は彼の説明によれば、個別的な数の混在形（saṁsargarūpa）あるいは数一般（saṁkhyātman, saṁkhyāsāmānya）に他ならない。要するに、これは数性（saṁkhyātva）という一般性の相で数の存在を知らしめるような数なのである。したがって、統合形においてはその従属語の指示対象は「数一、あるいは二、あるいは三をもつもの」（ekatvādivat）とは知られないが、「数をもつもの」（saṁkhyāvat）という形では知られるということになる。

2．本稿は、Bhartṛhari によって提起されたこの abhedaikatvasaṁkhyā という統合形における従属語指示対象の数を考察対象とする、Kauṇḍabhaṭṭa の Vaiyākaraṇabhūsaṇasāra の一章『abhedaikatvasaṁkhyā の確定』(abhedaikatvasaṁkhyānirṇaya）の和訳研究である。

当該章は、Bhaṭṭojidīkṣita の Vaiyākaraṇasiddhāntakārikā k.53に対する解説として提示されている。Bhaṭṭojidīkṣita は統合形における従属語指示対象が abhedaikatvasaṁkhyā をもつものとして認識されるとき、究極的には kapiñjalādhikaraṇanyāya にしたがってそれは一として認識される、という見解を表明し、abhedaikatvasaṁkhyā の存在を一応容認している。

Kauṇḍabhaṭṭa は abhedaikatvasaṁkhyā の解釈に関しては Bhartṛhari の説明をそのまま受入れ、単に古典文法学派の「確定見解」(siddhānta）としてこれを紹介しているにすぎない。彼の課題は、そのような数の存立そのものを問いなおすことにあった。

彼は、欲知（jijñāsā）すなわち特殊を対象とする欲知（viśeṣajijñāsā）の成立形態に着目する。彼の主張は次のように要約されよう。もし我々が複合語などの統合形を聞いたときに、従属語の指示対象に関してその数は一なのか二なのか、それとも三なのかといった数の特殊にたいする欲知を経験するとするならば、その欲知に先立って数一般の認識が成立していると考えられる。なぜならば、欲知とそのような一般の認識との間には因果関係があるからである（viśeṣajijñāsā sāmānyajñānapūrvikā）。しかし彼はそのような欲知そのものが統合形の意味の認識の後に生ずることは経験されないという。この意味で彼は abhedaikatvasaṁkhyā を経験の裏付けのない論理的想定（nyāyasiddha）とみなす。さらにまた、もし仮にそのような欲知が経験されるとしても、欲知とそれが前提する認識との間には別様の因果関係〔「認識と欲求とは PRAKĀRA を同じくするものとしてのみ因果関係を構成する。」(jñāneccchayoḥ samānaprakārakatvenaiva hetuhetumadbhāvaḥ)〕が想定されるとして、彼は統合形の上記のような欲知が前提するのは、一般の認識というよりはむしろ特殊の認識であ

ると考えなければならないともいう。こうして Kauṇḍabhaṭṭa は、いずれにせよ abhedaikatvasaṁkhyā という統合形の数の存立自体を否定する。

この Kauṇḍabhaṭṭa の abhedaikatvasaṁkhyā に対する否定的な態度は、彼固有のものではなく、否定の論証方法に違いはあっても彼をはじめとする新文法学派に共通にみいだされる。たとえば Nāgeśa もまた次のように述べている。

「その〔統合形において abhedaikatvasaṁkhyā が顕知されるという見解〕は正しくない。そのような〔統合形の意味とされる abhedaikatvasaṁkhyā の〕認識は経験されないから。なぜなら〔たとえ abhedaikatvasaṁkhyā が統合形によって表示されなくても〕dravya は数を逸脱しないということに基づいて、〔dravya に関して〕それ〔＝数〕の知識〔を得ること〕が可能だから。さらに、それ〔＝統合形〕におけるそのような〔個別的な数に関する〕欲知は本性的に確立されるものではなく、自己の潜在印象によって構想されるものだから。（中略）まさにこの故に、〔Mahā-〕bhāṣya に "abhedaikatvasaṁkhyā" という表現があらわれている、ということはない。統合形においては個別的な数〔の理解〕は生じない、というこの限りのことだけが samarthasūtra（P2.1.1）の〔Mahā-〕bhāṣya の意図するところである。その〔abhedaikatvasaṁkhyā の〕相で数が顕知されるということは〔複合語〈rājapuruṣa〉〕以外の事例においても経験されないから。」（LM 1382：tan na. tathābodhānaubhavāt. dravyasya saṁkhyāvyabhicāreṇa tajjñānasaṁbhavāt. tatra tādṛśajijñāsāyāḥ svarasataḥ siddhatvābhāvena svavāsanākalpitatvāc ca.　ata eva bhāṣye 'bhedaikatvasaṁkhyeti vyavahāro bhāsate iti ca nāsti. vṛttau saṁkhyāviśeṣo na bhavatīty etāvad eva samarthasūtre bhāṣyam. tena rūpeṇa saṁkhyābhānasyānyatrādṛṣṭatvāc ca.）

〔参考文献〕

K. A. Subramania Iyer : BHARTṚHARI A study of the Vākyapadīya in the light of the Ancient Commentaries, (Poona, 1969) , pp. 384—387.

S. D. Joshi : PATAÑJALI'S VYĀKARAṆA —MAHĀBHĀṢYA SAMARTHĀHNIKA (P.2.1.1), (Publications of the Centre of Advanced Study in Sanskrit Class C, No.3), pp. 58—61.

和　訳

翻訳にあたっては Rajasthan Sanskrit College Granthamālā 版を底本とし、必要に応じて他の刊本（拙稿『Kauṇḍabhaṭṭa の否定詞論』（広島大学文学部紀要第44巻をみられたい）を参照した。尚、訳注において引用した Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra 注釈文献は次のとおりである。

Prabhā : Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra of Śrī Kauṇḍabhaṭṭa. Edited with 'Prabhā' Commentary by Pt. Śrī Bālakṛṣṇa Pañcholi and with 'Darpaṇa' Commentary by Śrī Harivallabha Śāstrī. The Kashi Sanskrit Series 188. Varanasi, 1969.

Darpaṇa : Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra. Edited with the commentary *Kāśikā* by Śrī Hari Śāstrī and the commentary *Darpaṇa* by Śrī Harivallabha Śāstrī. Rajasthan Sanskrit College Granthamālā 10. Benares, 1934.

Kāśikā注 : Darpaṇa に同じ

Śāṁkharī : Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra. Edited with the commentary *Śāṁkharī* by Shankarashastri Marulkar. Ānandāśrama Sanskrit Series 135. Poona, 1957.

〔『abhedaikatvasaṁkhyā の確定』〕

54.0 〔導入〕統合形（vṛtti）に関連して、「それ〔＝統合形〕においては〔限定者（viśeṣaṇa）に関して〕abhedaikatvasaṁkhyā が理解される」という確定見解（siddhānta）を喩例を通じて〔Bhaṭṭojidīkṣita は〕正当化する。[1]

54.1　k. 54「abhedaikatvasaṁkhyā が統合形において顕知される、という〔見解が文法学者によって〕定立される。〔そしてこの abhedaikatvasaṁkhyā という数は数一（ekatva）として顕知される。〕Kapiñjalālambha 文において数三（tritva）が〔顕知される〕と、〔ある〕論理に基づいて言われるように。」

abhedaikatvasaṁkhyāyā vṛttau bhānam iti sthitiḥ / kapiñjalālambhavākye tritvaṁ nyāyād yathocyate //

54.2　〔〈abhedaikatvasaṁkhyā〉は二様の意味に解される。先づ第一解釈を示す。〕[2]

abhedaikatvasaṁkhyā とは、〔一（ekatva）、二（dvitva）、三（tritva）といった〕数の特殊（saṁkhyāviśeṣa）の、区別されざる存在（avibhāgena sattvam）である。

54.3　〔このことは〕Vākyapadīya に次のように言われている。

「その〔abhedaikatvasaṁkhyā〕という数は、すべての薬草液がそれらの効能を蜜中に保持したまま区別されることなくその蜜中に存在している、その〔蜜中のすべての薬草液の在り方〕に類似したものと考えられる。」

(yathauṣadhirasāḥ sarve madhuny āhitaśaktayaḥ / avibhāgena vartante tāṁ saṁkhyāṁ tādṛśīṁ viduḥ // VP III, 14, k. 101)[3]

54.4　〔第二解釈〕或はむしろ、それ〔=abhedaikatvasaṁkhyā〕は特殊の放棄された数一般（saṁkhyāsāmānya）である。[4]

54.5　〔同じく Vākyapadīya に〕次のように言われている。[5]

「あるいはまた、〔一、二、三といった数の〕個別（bheda）は放棄されるから、数自体（saṁkhyātman）がそのような性格のもの〔=abhedaikatva-saṁkhyā〕である。そしてそれは、種部分（jātibhāga）の働きに基づく個別の排除（bhedāpoha）によって生起する。」

(bhedānāṁ vā parityāgāt saṁkhyātmā sa tathāvidhaḥ / vyāpārāj jātibhāgasya bhedāpohena varttate // ibid., k. 102)[6]

「例えば、特殊の捉えられない相〔すなわち種の相〕で「〔このものは〕色を有する」(rūpavān) と知られるが、〔属性〕白〔性〕等の「個別という排除」(bhedāpoha) は理解されない場合のように。」[7]

(agṛhītaviśeṣeṇa yathā rūpeṇa rūpavān / prakhyāyate na śuklādir bhedāpohas tu gamyate // ibid., k.103)

54.6 これ〔=abhedaikatvasaṁkhyā〕が『統合形において』(vṛttau)、すなわち複合語 (samāsa) 等において『顕知される』。「そしてこの顕知は論理的に確立される」(nyāyasiddha) [8] というように補足さるべきである。

54.7 『という』(iti)、すなわち以上のような見解 (mata) が『定立される』(sthiti)。「文法学者によって」(vaiyākaraṇānām)［というように補足さるべきである］。

54.8 次のような意である。〈rājapuruṣa〉(「王の家臣」) 等の〔複合語の〕場合、〔それから生ずる認識の後に〕「彼は一人の王の家臣なのか、二人の王の家臣なのか、それとも三人以上の王の家臣なのか」(rājñaḥ rājñoḥ rājñāḥ vāyaṁ puruṣaḥ) という欲知 (jijñāsā) が生ずる。

54.9 そして特殊を対象とする欲知には一般を対象とする知識が先在する (viśeṣajijñāsā ca sāmānyajñānapūrvikā) [9]。従って、それ〔=数〕が言葉から一般〔すなわち数性 (saṁkhyātva)〕の相で知られることは必然である。

54.10 それ故、〔複合語等の統合形は〕それ〔=数としての数 (saṁkhyātvena saṁkhyā)、すなわち数一般 (saṁkhyāsāmānya)〕に対して直接的指示関係 (śakti) を有する。

54.11 それ〔=統合形を構成する語の意味の中で従属要素である個物〕の〔二、三ではなく〕一としての認識[10]に対する［それを正当化する］論理 (nyāya) を述べる。『Kapiñjala 云々』と。

54.12 複数性 (bahutva)〔に限定された多数のもの〕を勘定 (gaṇana) する場合、三 (tritva) こそが最初に想起されるから、〔複数性により限定されたものが〕それ〔=三(tritva)〕の相でのみ顕知されるように、一 (ekatva)

が〔他の〕すべての〔数〕に先んじて想起される、という意である。[11]

54.13 しかしながら実際には〔統合形における数の特殊を対象とする〕欲知は経験的に確立されない（nānubhavasiddhā）。

54.14 あるいはむしろそのように〔欲知が経験的に確立されると〕するならば、知識（jñāna）と欲求（icchā）は同一の PRAKĀRA を有するものとしてのみ（samānaprakārakatva）因果関係（hetuhetumadbhāva）を構成するから、〔統合形において数は一性（ekatvatva）、二性（dvitvatva）等の〕それぞれ〔特殊〕の相で表示される（vācya）はずであると考えられるべきである。[12]

〔以上で『abhedaikatvasaṁkhyā の確定』を終る〕

〔訳注〕

1) Cf. Vbh 226 : vṛttau viśeṣaṇe abhedaikatvasaṁkhyā pratīyata iti siddhāntaṁ nirūpayann āha. Śāṁkarī 432 : tatreti-vṛttighaṭakopasarjanapada ity arthaḥ.

複合語（samāsa）、taddhita 接辞で終る項目（taddhitānta）、kṛt 接辞で終る項目（kṛdanta）、ekaśeṣa、派生動詞（sanādyantadhātu）が一般に統合形（vṛtti）と呼ばれる。Cf. SK II, 215 : kṛt-taddhita-samāsaikaśeṣa-sanādyantadhāturūpāḥ pañca vṛttayaḥ. これら五種類の統合形のうち、abhedaikatvasaṁkhyā は統合形の意味における限定者（viśeṣaṇa, upasarjanapadārtha）の数概念に関わる訳であるから、限定者が本来的に没数（niḥsaṁkhya）である kṛdanta, sanādyantadhātu は本『確定』の考察対象とはならない。kṛdanta, sanādyantadhātu の場合、限定者である動詞の意味 kriyā（行為、ハタラキ）は、性（liṅga）、数（saṁkhyā）をもたない（asattva）。Cf. VP II, k. 195 cd : asattvabhūto bhāvaś ca tiṅpadair abhidhīyate. Mbh ad P1.1.38 : strīpuṁnapuṁsakāni sattvaguṇāḥ ekatvadvitvabahutvāni ca.

2) 統合形における adhedaikatvasaṁkhyā 顕知の根拠を Helārāja は次のように述べている。Helārāja on VP III, 14, k. 100 : vṛttāv upasarjanapadārthānāṁ sattvabhūtatvād āvaśyakaḥ saṁkhyāyogaḥ. na hy avyayavan nissaṁkhya evopasarjanārtho yuktaḥ, sattvamātrasyāsampratyayāt.（「統合形においては従属語の意味は sattva であるから、数結合は必然的である。なぜなら、従属〔語の〕意味が不変化詞（avyaya）のようにまさに没数であるというのは不合理だから。純粋に sattva だけが認識されるということはないからである。」）

〈rāja-puruṣa〉（「王の家臣」）という複合語の場合、従属語〈rājan〉の意味には数

結合が不可避である。すなわち、それは〈rāja-puruṣa〉から「数を有する王との関係を有するもの」という認識（saṁkhyāvad-rāja-saṁbandhīti bodhaḥ）が生ずるということを示す。Cf. Uddyota II 509. このような形の認識にあらわれる数が abhedaikatvasaṁkhyā と呼ばれるものに他ならない。

尚、「従属語」(upasarjanapada) というのは、P1.2.43,1.2.44に基づいて *upasarjana* という術語を得る項目ではなく、意味論の観点からみた従属要素（upasarjana）すなわち限定者（viśeṣaṇa）を知らしめる項目である。Cf. Uddyota II 509：upasarjanabodhakapadāni. したがって、P2.2.2に規定される複合語〈ardha－pippalī〉の場合には、従属語は〈pippalī〉である。

3) この詩頌の直前で Bhartṛhari は abhedaikatvasaṁkhyā の第一解釈を次のように提示している。VP III, 14, k. 100 cd：saṁsargarūpaṁ saṁkhyānām avibhaktaṁ tad ucyate.（「数〔の特殊〕が区別されない〔数の特殊の〕混在（saṁsarga）が、それ〔＝abhedaikatvasaṁkhyā〕と呼ばれる。」）

この解釈が意図するところは次のとおりである。Śāṁkarī 432－3：yathā sarve auṣadhirasā madhuny ekasmin sarvaśaktīr avasthāpya sarvānuvṛttarasatvarūpaikadharmāśritatvenāvibhāgam aikyam āpannā iva vartante tadvat samāsādivṛttāv upasarjanapade sarvasaṁkhyāḥ sarvānuvṛttasaṁkhyātvarūpaikadharmāśritatvenābhedam aikyam ivāpannāḥ pratīyanta ity arthaḥ. madhuni sarvarasānāṁ rasatvena bhānavad upasarjanapade sarvasaṁkhyānāṁ saṁkhyātvena bhānam iti yāvat.（「すべての薬草液が、蜜という単一のものに、それぞれの効能のすべてを保持したまま、すべての〔薬草〕液に随伴する〔薬草〕液性（rasatva）という単一の属性に依存するものとしての無区別（auibhāga）という同一性（aikya）をあたかも得ているかのように存在する。それと同様に、複合語等の統合形における従属語においては、すべての数が、すべて〔の数〕に随伴する数性（saṁkhyātva）という単一の属性に依存するものとしての無差別（abheda）という同一性をあたかも得ているかのように認識される。要するに、蜜の場合にはすべての〔薬草〕液が〔薬草〕液として顕知されるように、〔統合形における〕従属後の場合には、すべての数が数として顕知されるということである。」Cf. Uddyota II 509：vibhaktyabhāvena saṁkhyāviśeṣāṇāṁ tattadrūpeṇāpratīteḥ saṁkhyātvena sarvasaṁkhyānāṁ bhānaṁ madhuni sarvarasānāṁ rasatvena bhānavat.（「〔統合形における従属語にはP2.4.71により〕（名詞）接辞はないから、数の特殊はそれぞれの〔一性（ekatvatva）、二性（dvitvatva）といった〕相では認識されないから、数としてすべての数が顕知される。蜜の場合にすべての〔薬草〕液が〔薬草〕液として顕知されるように。」）

〈abhedaikatvasaṁkhyā〉は、この解釈では、abheda = ekatva = aikya であるから、abheda すなわち同一性（ekatva）の相で捉えられた数、を意味するということができよう。

この解釈に従えば、従属語〈rājan〉からすべての数が混在した形で認識される。し

かしながら、個々の数はそれぞれの相で認識される訳ではない。今Nをすべての数の混在形とし、n1, n2, n3…n parārdha（数の最上位数）を個々の数とするならば、n1, n2, n3等はすべて「数であるx, y, zがある」という形でしか捉えられず、「x, y, zはそれぞれn1, n2, n3である」という形の認識は得られない。n1, n2, n3はそれぞれの固有な属性（viśeṣadharma）の相ではなく、n1, n2, n3に共通する属性（sāmānyadharma）である数性（saṁkhyātva）の相で捉えられる。Nの顕知においては、そのような数性を有するx, y, zがNの成員としてすべて顕知される。

尚、当該詩頌中の〈āhita－śakti〉は二様に解され得る。

1）　āhitā sthāpitāḥ śaktayaḥ vātapittāditattaddoṣopaśamarūpakāryabhedabhinnā yais〔Śāṁkarī〕（「vāta, pitta 等のそれぞれの異常の平静化という効果の違いによって様々な、そのような śakti＝効能を保持するもの」）

この解釈では、〈avibhāgena〉が〈abhedena〉と同義とみなされる。

2）　āhitā tyaktā virodhaśaktiḥ parasparapratibandhyapratibandhakabhāvarūpā, na hi triputro dviputravyavahāraṁ labhate ityādibhāṣyādibodhitā yair〔Prabhā〕（「相互的な阻害関係という矛盾の能力（virodhaśakti）——それは「実に、二人の息子をもつものは『三人の息子をもつもの』と呼ばれることを得ない」といった Bhāṣya の言明等から理解される——を放棄するもの。」）

Cf. Mbh ad P6.4.96：na hi dviputra ānīyatām ity ukte triputra ānīyate. Kaiyaṭa は次のように説明する。Pradīpa IV 756: saṁkhyāśabdānām eṣa svabhāvo yat saṁkhyāntarasya gauṇasya mukhyasya vā viṣaye na pravartante.（「数詞は、比喩的にであれ第一義的であれ、他の数の領域には生起しない、というのが数詞の本質である。」）

この解釈では、〈avibhāgena〉は〈avirodhena〉（「無矛盾」）と解される。

4）　数の特殊の混在という〈abhedaikatvasaṁkhyā〉の第一解釈には実際には根拠がないものとして、第二解釈が提示される。Cf. Uddyota II 509：madhuni sarvarasavatsattājanyasya tattadrogādinivṛttirūpasya phalasyānubhavāt tatsattākalpane 'py atra sarvasaṁkhyāviśeṣakalpane mānābhāvaḥ.（「蜜の場合には、〔薬草〕液すべてを含有するものの存在より生ずる、それぞれの病等の治癒という結果が経験されるから、それ〔＝薬草液すべてを含有するもの〕が想定されるとしても、この場合数の特殊のすべての想定（sarvasaṁkhyāviśeṣakalpana）には根拠がない。」）

5）　〈abhedaikatvasaṁkhyā〉の第一解釈においては、複合語〈rāja-puruṣa〉の従属語〈rājan〉の部分の意味 {saṁkhyāvat－rājan}（「数を有する王」）は次のように説明された。すなわち、ある王Kに関し、Kはすべての数の特殊n1, n2, … n parārdha を有するものとして顕知されるが、n1, n2, … n parārdha それぞれの固有な属性が区別的に捉えられないことから、結果的にKは「数をもつ者」としてしか認識されない。一方、当該の第二解釈においては、Kに関し数一般（saṁkhyāsāmānya）だけが顕知

されることからKは「数をもつ者」として認識される。Cf. LM 1380：yathā dūrād rūpamātraṁ gṛhyate na tu śuklakṛṣṇādiviśeṣa evaṁ rājapuruṣa ityādau sat(t)vabhūtatvāt saṁkhyāvān atrārtha ity etāvat pratīyate, na tv avyayārthavad asaṁkhyo nāpi ghaṭādivad viśeṣasaṁkhyāvacchinna iti.（「遠方から色一般（rūpamātra）が捉えられ、白や黒等の特殊が捉えられないように、〈rāja-puruṣa〉等においては〔従属語〈rājan〉の意味は〕sattva であるから、「ここなるものは数を有する」（saṁkhyāvān atrārthaḥ）というこの限りの認識が生ずる。しかし〔その〈rājan〉の意味は〕不変化詞の意味のように没数でもなく、{ghaṭaḥ} 等の〔名詞接辞で終る項目の場合の〕ように特定数（viśeṣasaṁkhyā）に限定されているものでもない。」）

この第二解釈で〈abhedaikatvasaṁkhyā〉は、数一（ekatva）が上位の数のすべてに随伴するのと同様に、数の特殊の共通な属性として数一般も、すべての数の特殊に随伴するという意味で、「数一とあたかも異ならない（abheda）ような数」というように語義解釈される。Cf. LM 1380：yathaikatvaṁ dvitvādīnāṁ nimittaṁ tathedaṁ abhedaikatvaṁ sarveṣāṁ ekatvādīnāṁ nimittam iti sāpi saṁkhyety ucyate dvitvādyanusyūtaikatvād ekasvabhāvatvenābhinnam iveti tena padenocyate iti helārājaḥ.

6) 当該詩頌の後半部 vyāpārāj jātibhāgasya bhedāpohena varttate に関し、注釈家達は幾通りかの解釈を提示している。

① bhedasya viśeṣaṇasya yo 'poho 'grahas tena〔Darpaṇa〕→「数一般としての abhedaikatvasaṁkhyā は、種部分の働きに基づき、bheda すなわち限定者（viśeṣaṇa）〔＝自己の基体を他の基体から区別するものとしての数の特殊の固有な属性〕の apoha すなわち非把捉（agraha）によって生起する。」

② vyāpārāj jātibhāgasyeti. vṛttāv upasarjanapade saṁkhyātvarūpajāter eva vyāpārāt saṁkhyātvenaiva rūpeṇa saṁkhyābhānarūpavyāpārād ity arthaḥ. bhedāpoheneti. bhedasyaikatvatvādiviśeṣadharmasyāpoho vyāvṛttis tena vartate nāma viśeṣarahitasāmānyarūpeṇa vartata ity arthaḥ.〔Śāṁkarī〕→「数一般としての abhedaikatvasaṁkhyā は、数性（saṁkhyātva）という種の、数性の相での数の顕知という働きから、bheda すなわち、一性（ekatvatva）等の特殊的属性（viśeṣadharma）の apoha すなわち排除（vyāvṛtti）によって生起する。」

以上①、②の解釈では〈jātibhāga〉は数性（saṁkhyātva）を、〈bheda〉は一性（ekatvatva）等の特殊的属性を指す。数性（saṁkhyātva）の顕知により、それら特殊的属性は排除され、あるいは把捉されない（apoha）。

③ bhedāpohenety asya vyāpārād ity anenānvayaḥ, prakṛtyāditvāt tṛtīyā*. tathācaikatvatvāder jātiviśeṣasya bhedāgraharūpo yo vyāpāro viśeṣaṇātmā tato vartata ity arthaḥ.〔Darpaṇa〕→「数一般としての abhedaikatvasaṁkhyā は、〔jātibhāga すなわち〕一性等の特殊的種（jātiviśeṣa）の、〔数一般の認識に

対する〕限定者（viśeṣaṇa）である、bheda〔すなわち個別的数〕の非把捉という働きに基づいて生起する。」

④ prakṛtyādibhya upasaṅkhyānam ity anenābhede tṛtīyā※. tathā ca bhedasya ekatvādisaṁkhyārūpasya yo 'pohaḥ agrahas tadrūpavyāpārād ity arthaḥ. 〔Prabhā〕→「数一般としての abhedaikatvasaṁkhyā は、〔jātibhāga すなわち特殊的種の〕bheda すなわち一等の個別的数の apoha すなわち非把捉という働きに基づいて生起する。」

※ vt. ad P2.3.18：tṛtīyāvidhāne prakṛtyādibhya upasaṁkhyānam は同一性の第三格語尾 {abhede tṛtīyā} を規定する。

以上③、④の解釈では、〈jātibhāga〉は一性等（ekatvatva）の特殊的種（jātiviśeṣa）を、〈bheda〉は一（ekatva）等の個別的数を指す。特殊的種の個別的数の非把捉（apoha＝agraha）という働きとは、abhedaikatvasaṁkhyā の認識において、特殊的種の相で個別的数の認識されないことがその認識の限定者（viśeṣaṇa）として機能するということを意味する。したがって、abhedaikatvasaṁkhyā の認識は単なる数性の認識にとどまらず、同時に個別的数の非把捉をも伴う。こうして、「二性等〔の特殊的種の相で個別的数〕が把捉されない時における数性を PRAKĀRA とする認識」（Darpaṇa：dvitvatvādy-agraha-kālika-saṁkhyātvaprakārakapratīti）が、abhedaikatvasaṁkhyā の認識であるということになる。

⑤ jātibhāgasya saṁkhyātvasya. vyāpāras tenaiva rūpeṇa bhānam. bhedāpohena bhedarūpo yo 'poho 'tadvyāvṛttis tena vartate, tena rūpeṇa bhāsata ity arthaḥ. atadvyāvṛttir eva jātitātparyam.〔Kāśikā 注〕→「数一般としての abhedaikatvasaṁkhyā は、jātibhāga すなわち数性の働き（vyāpāra）により、すなわち数性の数性という相での顕知により、bheda すなわち排除＝それ以外のものからの排除（atadvyāvṛtti）という相で生起する。」

この解釈は、〈jātibhāga〉を数性（saṁkhyātva）に解し、この個別的数に共通する属性としての数性を bhedāpoha，すなわち「bheda という apoha」、すなわち「それ以外のものからの排除」（atadvyāvṛtti）を本質とするものとみなす。

Cf. Helārāja on VP III, 14, k. 102：bhedāpohalakṣaṇaṁ hi sarvasaṁkhyānāṁ jātirūpam anugatam…samastabhedānugatarūpam anyāpoharūpam…. yathā hy ekatvaṁ dvitvādy apāvartayati, dvitvaṁ ca tritvādi….（「bhedāpoha と特徴付けられるものが、すべての数に種の形で随伴している。（中略）すべての個別に随伴している相は「他者の排除」（anyāpoha）の相である。（中略）例えば、一（ekatva）が〔自己の基体に関し〕二（dvitva）等を排除し、さらに二（dvitva）が三（tritva）等を排除するように。」）

⑥ {bhedāpohena vartate} → {bhedāpoho na vartate}：

a) bhedarūpo yo 'pohaḥ atadvyāvṛttatvarūpaḥ, na tat atat, atasmāt vyāvṛttam

atadvyāvṛttam, ekatvabhinnabhinnam ekatvam, tasya bhāva ekatvatvam atadvyāvṛttatvaṁ, prakṛte tan na pratīyate ity arthaḥ.…apoho 'tadvyāvṛttir viśeṣadharma eva, samaniyatatvāt.〔Prabhā〕

b) bhedarūpo yo 'poho 'tadvyāvṛttaṁ sa na varttate, na bhāsate ity artho 'vaseyaḥ.〔Darpaṇa〕

→「〔jātibhāga すなわち数性の働きから、bheda すなわち排除＝それ以外のものからの排除という一性等の特殊的属性は生起しない。」

{bhedāpoho na vartate} の読みに基づく a)、b)の解釈は、〈bhedāpoha〉を⑤の解釈と同様「それ以外のものからの排除」と解する。しかしながら、⑤のそれが数性の記述であるのに対し、この場合のそれは数性という上位の種に対する下位の種である一（ekatvatva）等の特殊的種の記述である。

7) Cf. Darpaṇa 501：śuklatvādiprakārakagrahāsamānakālikarūpatvaprakārakapratītiviṣayeṇa śuklādinaiva yathā ghaṭādau rūpavān iti pratīyate. śuklāder yo bhedarūpo 'pohaḥ śuklatvādir atadvyāvṛttirūpaḥ sa tu na pratīyate.（「白性等〔の種〕を PRAKĀRA とする把捉と同時帯にない色性を PRAKĀRA とする認識の対象である白等を通じて、例えば瓶等に関して、「色を有するもの」（rūpavān）と認識されるように。白等の bheda という apoha、すなわち、「それ以外のものからの排除」という形の白性等は認識されない。」）

この詩頌中の〈bhedāpoha〉は、注6)中の解釈⑥に説かれるものである。

尚、後半部の {na śuklādir bhedāpohas tu gamyate} は、Vaiyākaraṇabhūṣaṇa 及び－sāra の全刊本に共通した読みであるが、Vākyapadīya では Iyer 本、Rau 本共に {na śuklādibhedarūpas tu gṛhyate} となっている。この読みでは、「しかしながら、白等の個別的色は把捉されない。」ということになる。

8) Cf. Prabhā 419：upasthitaṁ parityajyānupasthitakalpane mānābhāvaḥ iti nyāyasiddham. abhedaikatvasaṁkhyā は、統合形の直接的指示対象（śakya）であると考えられる場合、それは統合形から「想起されるもの」（upasthita）である。現に経験されるものを放棄して、経験されることのないものを想定することに根拠はない、というのがこの論理（nyāya）の主旨である。

9) 欲知（jijñāsā）あるいは「特殊を対象とする欲知」（viśeṣajijñāsā）は、{ko 'yaṁ brāhmaṇaḥ}（「ここにいるバラモンはどのようなバラモンなのか」）といった疑問形式の言明で表現される。

Cf. Prabhā 420：samabhivyāhṛtapadārthatāvacchedakāvāntaradharmaprakārakajñānecchā.（「欲知とは疑問詞と一緒に用いられている語の意味性の局限属性（padārthatāvacchedaka)に包含される属性を PRAKĀRA とする知識を［対象とする］欲求である。」）{ko 'yaṁ brāhmaṇaḥ} の場合、欲知は、〈brāhmaṇa〉という語の padārthatāvacchedaka である brāhmaṇatva（バラモン性という種）に包含される属性を通じて〈brāhmaṇa〉

という語の適用されているこのものを知らんとする欲求である。そしてこの欲知には、brāhmaṇatva の認識が先在していなければならないことは言うまでもないであろう。

Cf. Prabhā 420 : yadā ayaṁ brāhmaṇaḥ iti jñānaṁ nāsti tadā ko 'yaṁ brāhmaṇaḥ iti brāhmaṇatvavyāpyajātiviśeṣajijñāsā na jāyate. sāmānyajñānasattve tu viśeṣajijñāsā jāyate ity anvayavyatirekābhyāṁ viśeṣadharmaprakārakajijñāsāṁ prati sāmānyadharmaprakārakajñānasya kāraṇatvaṁ kalpyate.（「『ここにいるものはバラモンである』(ayaṁ brāhmaṇaḥ) という知識がない時、『ここなるバラモンはどのようなバラモンか』(ko' yaṁ brāhmaṇaḥ) という brāhmaṇatva に遍充される特殊的種 (jātiviśeṣa) を対象とする欲知は生じないし、一般を対象とする知識がある時には特殊を対象とする欲知が生ずるから、このような肯定的共在関係 (anvaya) と否定的共在関係 (vyatireka) に基づき、特殊的属性を PRAKĀRA とする欲知に対し、一般的属性をPRAKĀRA とする知識は原因であると想定される。」）

10) Cf. Darpaṇa 502 : tasyā iti. vṛttighaṭakapadārthopasarjanavyakter ity arthaḥ. 複合語〈rājapuruṣa〉の意味における従属要素個物王は「一人」として認識される、ということである。このような認識の構造は次のようなパラフレイズによって示される。

{saṁkhyātvāvacchinnaikatvaprakāratānirūpitaviśeṣyatvena bodhaḥ}〔Darpaṇa 502〕.（「数性により限定された一に存する PRAKĀRATĀ により条件付けられた被限定者性 (viśeṣyatva) の関係での〔個物の〕認識」）

11) Cf. JS 11.1.38－45 kapiñjalādhikaraṇa. この論題 (adhikaraṇa) について Jaiminīyanyāyamālāvistara は次のような解題を提示している。

［考察対象］(viṣaya) ：“vasantāya kapiñjalān ālabhate”（「Vasanta にkapiñjala 鳥の犠牲がささげられるべし」）という Aśvamedha 祭に関する聖典文。

［疑問］(sandeha) ：〔“kapiñjalān” = {kapiñjala + Śas} の複数語尾 (bahuvacana) Śas によって※〕三 (tritva)、四 (catuṣṭva) 等の数が任意に (pākṣika, icchayā) 把握されるのか、それとも三だけが把握されるのか。

［反論］(pūrvapakṣa) ：三、四等の数には複数性 (bahutva) が共通して存するから、任意に三以上の数がどれでも認められるべきである。

［確定論］(siddhānta) ：否。まさに三だけによってこの儀軌は目的を達するから。なぜなら、四等の数を規定している〔儀軌〕によって、四等に含まれる (antarbhūta) 三を除外することはできないが、三を規定している〔儀軌〕によっては、〔三に〕含まれない四等が除外され得るからである。従って、〔四以上の数に〕必然的に存し (avaśyaṁbhāvi)、〔複数性に限定された諸数の中の〕最初にあり (prathamabhāvi)、〔四以上の数に比して〕簡単な (laghu) ものとしての三が規定されている。そしてこのような形で儀軌の意味が確立される場合、三〔羽〕以上の鳥の殺生には罪(pratyavāya) が生ずる。それ故、この儀軌によっては三だけが規定されている。

※ P1.4.21 bahuṣu bahuvacanam, 1.4.22 dvyekayor dvivacanaikavacane.

{vasantāya kapiñjalān ālabhate} においては {kapiñjalān} の複数語尾によって複数性が表示されている。ところでこの複数性は三から parārdha までのすべての数にあまねく存在する属性である。したがって、三から parārdha までの数のうちの数の指定は任意となりはしないかという問題が生ずる。しかしながら、複数性に限定された数の中で三が、以下のような根拠に基づいて特定される。

1) 三は上位の数に必然的に存する（avaśyaṁbhāvitva）。
2) 複数性に限定された諸数の中の最初にあり（prathamabhāvitva）、それら諸数の中で最初に想起される（prathamopasthita）。
3) 簡単である（lāghava）。

統合形〈rāja-puruṣa〉から {saṁkhyā-vad－rāja－saṁbandhī}（「数を有する王との関係を有するもの」）という認識が生起する場合、この数は abhedaikatvasaṁkhyā と呼ばれるものであることはすでに述べた。abhedaikatvasaṁkhyā は、数の特殊の混在形（saṁsargarūpa）としてであれ数一般（saṁkhyāsāmānya）としてであれ、それが統合形の従属語の意味に関して顕知される時、数性（saṁkhyātva）の相でしか数の存在を示さない。

〈rāja－puruṣa〉
↓
{saṁkhyā－vat－rāja－sambandhī}
saṁkhyāviśeṣasaṁsarga－vat－° /saṁkhyāsāmānya－viśiṣṭa－vat－°
↓
saṁkhyātva－viśiṣṭa－vat－°

ところで、言うまでもなく数性は一から parārdha までの個々の数に共通に内在している属性である。こうして、kapiñjalālambha 文において複数性に限定された諸数の中から三が特定される根拠を、統合形の従属語の意味（複合語〈rāja－puruṣa〉の場合、個物王）に関する数の観念に適用するならば、数性に限定された諸数（saṁkhyātva－viśiṣṭa）の中からまさに一が特定されることになる。

尚、Kauṇḍabhaṭṭa は上記の kapiñjalādhikaraṇanyāya の妥当性を認めていないことに留意さるべきである。Cf. Vbh 226 : tritvatvena prathamopasthitau na niyamaḥ. daśatvādīnām api prathamopasthitatvāt. gaṇanāyāś cāniyamāt. viparītagaṇanāyām api kasyacid vyutpannatvāt.

12) これによって abhedaikatvasaṁkhyā そのものが Kauṇḍabhaṭṭa により否定されることになる。

知識と欲求とが PRAKĀRA を同じくするものとして因果関係を結ぶ例として次のような場合が挙げられる。

Prabhā 422 : yasya puruṣasya sadyaḥśuklakaraṁ payaḥ iti jñānaṁ jāyate, tasya payo me jāyatām itīcchotpadyate. tathā ca taddharmaprakārakecchām prati

taddharmaprakārakajñānatvena kāryakāraṇabhāvaḥ sarvasiddhaḥ. {sadyaḥśuklakaraṁ payaḥ}（「乳はたちどころに白くする」）という認識から、{payo me jāyatām}（「乳が私に生じて欲しい」）という欲求が生ずる場合、この欲求の対象である乳は、まさに「たちどころに白くするものとしての相（sadyaḥśuklakaratva）で捉えられた乳であり、他の相での乳がこの場合欲求されている訳ではない。ここには、乳のたちどころに白くするものとしての知識（sadyaḥśuklakaratva－prakāraka－payo－viśeṣyaka－jñāna）から、たちどころに白くするものとしての乳の欲求（sadyaḥśuklakaratva－prakāraka－payo－viśeṣyaka－icchā）が生ずるという知識と欲求の因果関係が見てとれる。

ところで、この PRAKĀRA を同じくするものとしての知識と欲求との因果関係は、当該の統合形に関して想定される欲知（jijñāsā）とそれが前提する知識との間に成立するのであろうか。

Kauṇḍabhaṭṭa は、欲知すなわち特殊を対象とする欲知（viśeṣajijñāsā）が経験されるとするならば、PRAKĀRA を同じくするということに基づく因果関係に立脚して特殊を対象とする知識の存在が想定されると考える。しかしながら、彼のこのような見解には次のような難点がある。欲知とは知識を対象とする欲求（jñānecchā）である。乳を欲求する場合と異なり、この場合には、XをYの相で捉える知識（{X Y-vat iti jñānam} ＝Y－prakāraka－X－viśeṣyaka－jñāna）があり、欲求はこのようにXをYの相で捉えるものとしての知識を対象とする（{jñānaṁ me jāyatām}）から、Yはこの欲求の直接的（svātantryeṇa）PRAKĀRA ではあり得ない。したがって、乳に対する欲求と乳の知識の場合のように、欲知と知識が共に同一のものを自己の直接的 PRAKĀRA とすることによって因果関係を構成するということはない。こうして特殊を対象とする欲知がある時、その原因としてその特殊を対象とする知識の存在が想定されると言うことはできないであろう。Cf. Prabhā 421－422.

（インド哲学助手）

Kauṇḍabhaṭṭa on the number *abhedaikatvasaṁkhyā*

Hideyo OGAWA

This article consists of an annotated Japanese translation of the *abhedaikatvasaṁkhyā-nirṇaya* ("final determination of the number *abhedaikatvasamkhyā* as expressed by the subordinate word in an integrated form (*vṛtti*)") in the *Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra* of Kauṇḍabhaṭṭa.

In considering the special features of the integrated form, Patañjali points out that a particular number (*saṁkhyāviśeṣa*) occurs in a sentence (*vākya*), as in *rājñaḥ puruṣaḥ, rājñoḥ puruṣaḥ, rājñāṁ puruṣaḥ*; while in a compound (*samāsa*) such as *rājapuruṣaḥ* it does not occur.

Bhartṛhari interprets Patañjali's statement "in a compound a particular number does not occur" (*samāse* [*saṁkhyāviśeṣo*] *na bhavati*) as signifying that in a compound something distinct from particular numbers occurs (**samāse a-saṁkhyāviśeṣo bhavati*). Bhartṛhari thus invents the number *abhedaikatvasaṁkhyā* for the integrated form, which he considers to be expressed by its subordinate member. This *abhedaikatvasaṁkhyā* is 1) an amalgam of all particular numbers or 2) number in general, accoring to Bhartṛhari.

For the following two reasons, Kauṇḍabhaṭṭa does not accept the occurrence of such a number in an integrated form. 1) After hearing an integrated form, we feel no desire to know what number a referent of its subordinate member has (*viśeṣajijñāsā*), from whose occurence we may infer, on the basis of the causal relation *viśeṣajijñāsa sāmānyajñānapūrvikā*, that the integrated form expresses *abhedaikatvasaṁkhyā*. 2) Granted that we have such a desire, from its occurrence we infer that the integrated form expresses

a particular number rather than *abhedaikatvasaṁkhyā,* on the basis of a different type of causal relation, namely *jñānecchayoḥ samānaprakāra-katvenaiva hetuhetumadbhāvaḥ.*